
ふたつのセカイ

Takagin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたつのセカイ

【Nコード】

N6754Q

【作者名】

T a k a g i n

【あらすじ】

二人の青年、龍哉と嵐が迎えに来たのはちょっと変わった女の子、さや。

異世界に興味があつて、噂ではものすごく強いらしい。

そんな彼女は龍哉のことが気になり出す。あまり自分の事を話さない彼の素性を知らうと彼女は人の記憶を覗く事ができる能力ちからを使う。

そして、その能力のせいで知ってしまう龍哉の過去と正体、それから自分との接点―。

いち（前書き）

わたくし、飽き性なので何かの拍子に打ち切ったり、無理矢理完結に持って行ってしまうかもしれませんけど、どうぞ続く限り見てやって下さい。。。

まだどうなるかわかりませんがとりあえず残酷な描写はアリにしておきます。

いち

三月。毎年この月になると街の代表が四月からの新人を捜し、一斉に国を出る。

その中に彼らは居た。

「ねえ龍哉あ、今年はどんな子？」
と、嵐。

「女の子」

龍哉が答える。

「女の子かあ…珍しいね。かわいい子かな？」
嵐の周りにお花が咲き乱れている。

「…。あ、写真あるけど？」

「見せて見せて〜っ」

「ほい」

龍哉は持っていた写真を渡した。

「へえ〜、大人しそうな子だね。…けど、カワイイじゃんっ」

「何、狙ってんの？」

「いいじゃん」

「バカ、10個も年下だぞ？」

「恋愛に年齢は関係ありませんっ！！」

「あっそ」

「で、この子名前は？」

「えっと…」

ポケットからメモを出す龍哉。それを読み上げる。

「名前は下山さや、17歳。…なんか期待の新人らしいぞ？」

「ふ〜ん。こんな子がねえ」

「まあ、会ってみなきゃ分かんねえけどな」

「だね」

そんな話をしながら二人はある一軒の家に到着した。

「おい。裕也、居るかー？」

コンコンとドアをノックしながら龍哉が呼んだ。

「はいはい。居ますよー」

中で声がした。

「入るぞ」

「どーぞー」

中に入ると、いつものように白衣を着た裕也が立っていた。

「久しぶりい。龍ちゃん、嵐くん」

その挨拶に嵐が

「久しぶり〜」

と返した。

「あ、そうだ。準備、できてるよん」

そう言って裕也は部屋を出て行った。それに続いて二人も部屋を出た。

それから三人は階段を降りて、地下室に着いた。その部屋の中央には大きな穴が空いていて、中が七色に光っている。そしてその周りにはソファやテーブルが置かれていた。

「そんじゃ、行こっか」

と、嵐。

「うん」

龍哉が返事をする。

「じゃーねー。いつてらっしゃい」

ニコニコしながら裕也が言った。

それから、龍哉と嵐は穴の中へと消えた。

に

「ここ……ベランダ？」

二人が着いたのはさやが住む家のベランダだった。

「ああ。部屋はここで間違っていないはずだ。それに、今は夜中だから玄関からインターホンなんか鳴らして行ったら迷惑だろ？彼女が出るとも限らないし」

「なるほど」

龍哉の言葉に嵐は納得した。

二人が尋ねて来たのはさやであり、彼女の家族は勿論、周囲の人にも気づかれてはいけない。そのためにこの時間帯に来たのだ。

彼女の部屋の中は勿論電気が消され、暗い。けれど月明かりが窓際に置かれたベッドには当たっていて、布団が膨れているのが見えた。こんな時間だ。寝ていて当たり前なのだ。

しかし、嵐は隣で龍哉が窓ガラスを必死にノックしているのを見てしまった。

（絶対、起きないでしょ！！）

そう思ったが仕方がない。そのまま見ていると、何度目かで布団がモソッと動いた。どうやらこんな小さな音に気付いたらしく、布団の中の人物が起き上がりキョロキョロした後、目を擦りながら窓の方へ近付いてきた。

どうやらこの子がさやのようだ。

「こんな所からすみません。ちょっといいですか？」
窓越しに龍哉が言った。

「どうぞ、入ってください」
と、彼女。

なんと勇敢な。見ず知らずのしかも男（二人）を部屋にあげようとは。

「いや、別にここでいいので…」

寝ぼけているのだと思った龍哉は遠慮したが、

「ダメですつ。外寒いですから」

と否定された。

うん、寝ぼけてはなさそうだ。

それから少しの間押し問答が続いたが、結局、龍哉と嵐は彼女の部屋にあがった。

「君、女の子なのにオレたちなんか部屋に入れて嫌じゃない？普通はさ、怪しがつたり、悲鳴あげたりしない？」

と、嵐。

「ですよ…。まあ怪しがつてないこともないですけど。わたし、ちよつと変わってるんだと思います。こんな風なことが起きてほしいなあなんて前から思ってたぐらいなんで…」

「こんな風なこと？」

「お二人は普通の人じゃないですよ？何か特別な組織とか、別の世界から来たとか。違います？」

「当たり前」

と、龍哉。確かに二人は今いるこの世界の者ではない。

「やっぱり。わたしはこういう普通じゃない何かが起きるのをずっと待ってたんです」

「へえ…。でもそういうことなら話は早いね」

と言う嵐。

「…それで、どういった用なんですか？」

さやが訊いた。

「そうだな…。まあいろいろ話してもアレだからひとまず俺たちについて来てほしい。話はそれからだ」

「はい。…と言いたいんですけど、そういうのってどこか別の世界とかに連れて行かれちゃったりして、わたしは突然消えてしまうつて感じになるんじゃないですか？そうになると家族とかにも迷惑かけちゃうかもしれないし」

「いや、そんなことはない。君が俺たちと来ている間、こつちの間は止まってるんだ」

「ほう」

「あ、嫌ならいいんだよ？また来年別の子捜せばいいんだし」
嵐が口をはさんだ。

「来年…ですか？」

「うん、そう。年に一人しか選ばれないって決まってるんだよ。まあ、たまゝに二人とかになる時もあるけどね」

「そうなんですか。あ、わたしは別に嫌なんて思っではないです」

「じゃ、一先ず靴取って来な」

と、龍哉。

「はい、分かりました」

と言つてさやは部屋を出る寸前で立ち止まった。

「あの、お二人、名前は何て言うんですか？」

「俺は龍哉」

「オレはラン。漢字で書くと『嵐』。よろしくね」

「あ、よろしくです。えっと、わたしは…」

「さや、だろ？」

「やっぱりこういうのって相手の名前は知ってるものなんですね」

「ちゃんと選ばれた人のところに行かなきゃいけないからな」

「へえ」

そう言つてさやは部屋を出た。

さん

「着いたっ」

嵐が言った。

（あれ？さっきまでベランダにいたのに…）

さやは思った。龍哉に言われて玄関まで靴を取りに行った後、自分の部屋に戻って狭いベランダに三人並んで、「行くぞ」という龍哉の声と共に一歩… たった一歩だけ踏み出した。それだけで着いたと言われた。

「えっ、もう到着ですか？」

「そーだよ？すごいでしょ。オレだったらもうちよっと時間かかったやうなけどね」

「へえ、魔法みたいなモノですか？」

「ん、そんな感じかな？能力ちからって言うんだけど、龍哉はこれをおくさん持つてるの。で、しかも一個ずつがめっちゃ強い」

「す、すごいんですね…」

「さやちゃんも持つてるんだよ？」

「わたし、も？」

「そう。だからオレたちが捜しに来たんだよ？」

「わたしのはどんな能力なんでしょう？」

「それはまだ分からないな。でも、期待されてるらしいよ」

「えっ、そ、そんな訳ないですよっ」

「あはは。でも、楽しみだね。どんな能力なのか…」

一瞬、嵐の表情が険しくなった。

「嵐さん？」

「ん？」

「あ、いえ、何でもないです」

「おーい。二人とも何やってんだ？」

さやと嵐がずっと話していて待ち切れなくなった龍哉が声をかけた。

「あ、ゴメンゴメン」

「入るぞ」

そう言って龍哉はある一軒の家の中へと入って行った。

「ここは？」

さやが訊くと

「ああ、ここはこの世界と俺たちがいた世界を繋いでるところで、裕也って奴が住んでる」

と、龍哉が説明した。

「住んでるって…普通の家ってことですか？」

「表向きはそういうことになってる」

「そうなんですか…」

そして三人ともその家に入った。

よん

「ちわー」

「お邪魔します…」

恐る恐る入るさや。

「いらっしや〜い」

中から返事が返ってきた。

少し奥へ行くと、白衣を着た裕也が笑顔で立っている。

「じゃあついて来て」

四人はその家の地下室の前に着いた。

そこには大きくて頑丈そうな扉があった。その扉を先頭を歩いていた裕也が開けた。

「龍ちゃんっ」

突然、小学校低学年くらいの男の子が走ってきて龍哉に飛びついた。

「いい子にしてたか？」

「うんっ。チビとあそんでた」

「なんだ、來香居ただろ。遊んでくれなかったのか？」

「うん。ちびがうつるからいやだって」

「ぶはっ、なんだそれ。あいつだって小っせえのにな」

龍哉が笑いながら言う。

(？龍哉さんの質問の仕方、何だかあの子のお父さんみたい)

さやは思った。

「あの…」

さやが呟くと、

「あ、こいつは翔。一応俺の息子だ」

と、龍哉が言った。

「息…。えっ!？」

驚いた。どうやら本当に親子であつたようだ。まあ、居てもおかしくはないだろうけれど…。

「なんだよ。何か変か？」

「あ、別に変だなんて」

「ま、いいや。翔、挨拶して」

「うん。…はじめまして、さやちゃん。…ほら、チビもあいさつして」

（この子もわたしの名前知ってるのか）

翔が言つと彼よりもさらに小さいぬいぐるみのようなものが歩いて来て言つた。

「ニヨニヨニヨニヨニヨ」

「”よろしくね”だつて」

「あ、よろしくね」

「このこはね、チビ。かわいいでしょ？」

「うんっ、かわいいね」

その時、嵐が呼んだ。

「さやちゃん、ちょっとこっち来てー」

「あ、はい」

さやは返事をして翔とチビも一緒に嵐たちの近くへ行つた。

そこには龍哉と嵐と裕也以外にもう一人さやの知らない人物が居た。

「初めまして」

その人が声をかけてきた。かつこいいハスキーボイスだ。

「あ、初めまして。さやです」

「私は來香。よろしくね」

「あの…」

さやが口ごもると、來香が言つた。

「あつもしかして私のこと男だと思つた？」

「え？あ、いや…」

「あはは。ねえ龍哉あまた間違われちゃつた」

來香さんは笑って龍哉に話し掛ける。

「お前がそんなカッコしてるからだろ？」

龍哉が言う。

「いいの。こっちの方が趣味に合ってるから」

「お二人、仲いいんですね」

「実はね、私が女だって当てたの龍哉が最初なんだ」

「そうなんですか」

「あ、そこも面白い？」

嵐が言った。

「みんな集まってから順番さやちゃんの事紹介しようと思ってたけど何かもういいみたいだからとりあえず全体的な事説明するね」

「はい。お願いします」

「えーと、まずオレたちが元居た場所は白の国ってトコで、緑の街の警護をしてた。あ、白の国にはね、紅の街、黄土の街、緑の街、碧の街それから白の街っていうトコがあって街毎に警護をする隊があるんだ。隊に属する人はみんな能力を持っていて、白の国と対立する黒の国との戦いに参戦したり、街の治安維持をしてる。あ、ここまでいい？」

「あ、はい…何となく」

「で、さやちゃんはおレたちのこの緑の街の隊に入ってもらいます」「分かりました」

「じゃ、とりあえず着替えてもらっていい？ここで服選んで」

と、少し大きなドアの前で嵐が言った。ドアを開けながら

「まあ基本的に、インナーは黒、上着は緑系が一番だね。他の街の人もそれぞれの街の名前にちなんだ色の服を着てるからね。って言うても自由っちゃあ自由だから。どこかに緑系をいれればオッケーだよ？」

と言った。

「了解です」

と言ってさやは中へ入って行った。

「あの〜」

着替え終えてさやは部屋を出た。

「あ、終わったみたいだね。んじゃ、これから向こうの世界に行くよ」

「はい。…でもどうやってですか？」

「あの穴の中に飛び込むんだよ」

「穴…」

部屋の中央に開いた穴を見るさや。

「あ、あれですか」

「そうそう。オレが最初に行くから着いてきてね」

「はいっ。分かりました」

そして皆が飛び込んだ後でさやも飛び込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6754q/>

ふたつのセカイ

2011年2月18日21時25分発行